

【原著】

入試区分（一般・推薦・AO）別にみる 国公立大の受験・入試動向の推移

柴田洋三郎，武谷峻一（九州大学）

平成9年度以降の大学入試の受験・入学動向を，文部科学省大学入試室発表データを用い，マクロ的に数値分析した。入学者数・入試区分別比率や志願・合格倍率などが大きく変動した反面，受験率・入学率などは，設置者別・入試区分別に一貫した数値傾向をしめした。分析から，国公立大と私立大とでは，制度に起因する一般入試の相違だけでなく，推薦・AO入試にも際だった対比を認め，我が国の大学入試は，国公立と私立の2セクターに大別できることを，数値的に確認できた。これらの諸数値は，各々の選抜特性と入試動向を反映する指標として，今後その推移が注目される。

我が国における大学入学者選抜は，学力中心の一般入試，高校からの推薦入試に，平成12年度からAO入試が加わり，大きく3つに区分される。また国公立と私立大学とでは，一般入試の実施方式が異なる。入学者選抜に設置者別にそれぞれが固有の背景をもつことは，暗黙裏に周知されている。我が国の大学間での入学者選抜研究の連携交流を目的に，平成18年入研協が再発足した。今後さらに相互の議論を深めるためには，国公立グループ間で客観的な特性についての共通認識が必要である。その一助として，これまで公表されたデータを経年的に分析し，入試区分別，設置グループ別に各々の外形的な特徴を示す指標を概括的に数値把握し分析することを試みた。

1 基礎データと解析

毎年度文部科学省大学入試室から公表され，大学入試センター発刊「大学入試フォーラム」巻末に掲載の統計資料から，募集定員，志願者数，受験者数，合格者数，入学者数を用い，分離分割方式に統一された平成9年度から平成20年度までのデータを分析した。この集計は設置者別に国公立大学の3グループに分かれている。今回は一般入試・

推薦・AOのおおまかな選抜3区分について，特に受験・入学動向を，設置者ごと，入試区分ごとに，経年的な推移を重視して比較し，概括的な定量指標の把握に努めた。これらの分析から，我が国の大学入学の現状と将来像を描くため，追跡すべき基礎的指標の抽出を試みた。

2 結果

2.1 人数の推移

集計されたデータのうち，延べ総数でなく唯一の実員数である総入学者数はこの間に約60万人弱で安定している（表1）。しかし，設置者別，入試区分ごとにみると，人口動態や社会環境などを反映し，大きく変動しつつある（図1）。国立では，定員，志願者，受験者，合格者，入学者のいずれもが漸減している。公立は，新設校の増加により，いずれも人数は増加傾向にあるが，志願倍率は，7.2から5.4倍に低下している。私立大学は，募集人員と合格者の増加に比べ，志願者，受験者，入学者には，対応した増加がみられず，志願倍率は9.2から6.9程度に低下している。この減少は，受験者と合格者との比（実倍率）でも，顕著に認める（表1）。

表1 平成9年度～20年度 大学入試総括表

区分	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	
全体の合計	募集定員	503,599	511,754	521,418	532,614	537,097	541,428	544,038	540,938	547,728	557,481	562,797	565,661
	志願者数	4,156,865	3,892,818	3,562,505	3,408,608	3,461,591	3,653,145	3,763,193	3,638,773	3,557,226	3,493,987	3,570,230	3,607,585
	受験者数	3,839,135	3,595,228	3,290,192	3,139,818	3,204,438	3,393,031	3,496,231	3,363,602	3,279,962	3,240,021	3,320,538	3,347,049
	合格者数	1,115,168	1,126,563	1,124,970	1,116,019	1,077,084	1,064,511	1,065,768	1,090,582	1,133,562	1,181,825	1,216,025	1,191,214
	入学者数	583,616	586,783	584,944	592,878	593,998	597,026	593,497	587,399	593,072	593,928	604,742	596,348
国立大学	募集定員	103,914	102,364	99,737	97,187	97,175	96,950	97,085	96,423	96,393	96,301	96,186	95,868
	志願者数	500,088	480,780	450,751	471,281	462,541	468,907	468,140	448,038	423,929	425,001	413,870	411,476
	受験者数	386,757	372,654	347,478	363,391	358,900	366,514	364,645	344,601	321,208	322,820	312,703	310,896
	合格者数	121,121	118,533	115,856	112,563	112,125	111,806	112,243	111,954	112,687	112,337	111,308	109,958
	入学者数	108,531	106,546	104,378	102,154	101,834	102,069	102,394	102,158	102,759	102,824	101,306	101,218
	実倍率	3.19	3.14	3.00	3.23	3.20	3.28	3.25	3.08	2.85	2.87	2.81	2.83
	入学率	0.90	0.90	0.90	0.91	0.91	0.91	0.91	0.91	0.91	0.92	0.91	0.92
	充足率	1.04	1.04	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.06	1.07	1.07	1.05	1.06
公立大学	募集定員	17,583	18,628	19,821	20,896	21,697	22,127	22,384	22,567	23,702	24,506	25,008	25,008
	志願者数	126,076	122,574	132,468	137,225	139,614	145,815	151,431	139,936	137,621	138,276	135,143	137,463
	受験者数	91,612	90,184	98,350	102,241	105,715	110,395	114,679	107,150	103,180	105,698	102,600	100,547
	合格者数	26,211	26,783	28,034	29,294	30,130	30,743	31,337	31,355	32,962	33,706	34,469	34,164
	入学者数	19,163	19,871	21,241	22,464	23,322	23,848	24,436	24,369	25,557	26,282	26,613	27,063
	実倍率	3.50	3.37	3.51	3.49	3.51	3.59	3.66	3.42	3.13	3.14	2.98	2.94
	入学率	0.73	0.74	0.76	0.77	0.77	0.78	0.78	0.78	0.78	0.78	0.77	0.79
	充足率	1.09	1.07	1.07	1.08	1.07	1.08	1.09	1.08	1.08	1.07	1.06	1.08
私立大学	募集定員	382,102	390,762	401,860	414,531	418,225	422,351	424,569	421,948	427,633	436,674	441,603	444,785
	志願者数	3,530,701	3,289,464	2,979,286	2,800,102	2,859,436	3,038,423	3,143,622	3,050,799	2,995,676	2,930,710	3,021,217	3,058,646
	受験者数	3,360,766	3,132,390	2,844,364	2,674,186	2,739,823	2,916,122	3,016,907	2,911,851	2,855,574	2,811,503	2,905,235	2,935,606
	合格者数	967,836	981,247	981,080	974,162	934,829	921,962	922,188	947,273	987,913	1,035,782	1,070,248	1,047,092
	入学者数	455,922	460,366	459,325	468,260	468,842	471,109	466,667	460,872	464,756	464,822	476,823	468,067
	実倍率	3.47	3.19	2.90	2.75	2.93	3.16	3.27	3.07	2.89	2.71	2.71	2.80
	入学率	0.471	0.469	0.468	0.481	0.502	0.511	0.506	0.487	0.470	0.449	0.446	0.447
	充足率	1.19	1.18	1.14	1.13	1.12	1.12	1.10	1.09	1.09	1.06	1.08	1.05

入試区分（一般・推薦・AO）別にみる国公立大の受験・入試動向の推移

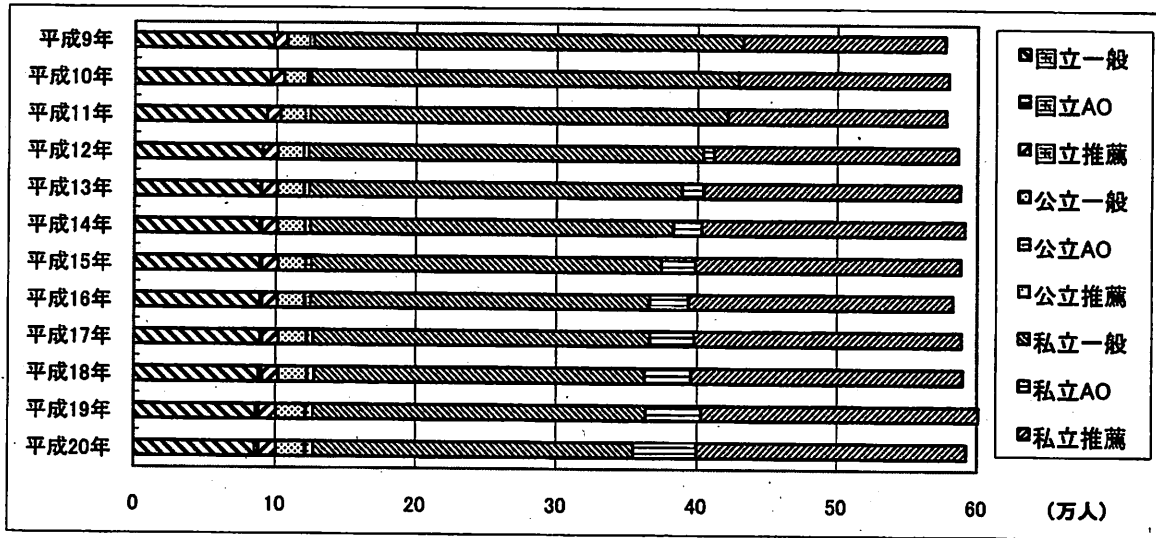


図1 国公立大の入試区分別入学者数

図1は、現行の分離分割方式に完全に移行した平成9年度以降、入試区分別の実人数の比較である。公立大学の増加を除き、一般入試での入学者は、推薦入試の募集枠緩和以降から、特に私立大学で急速に減少しつつあ

る。推薦入試は一時期増加したがその後安定し、5割までの上限もあつてか、私立大学では平成14年から19万人台で頭打ちとなっている。最近ではAO入試の急速な増加がとくに私立大で顕著で4万5千人近くになっている。

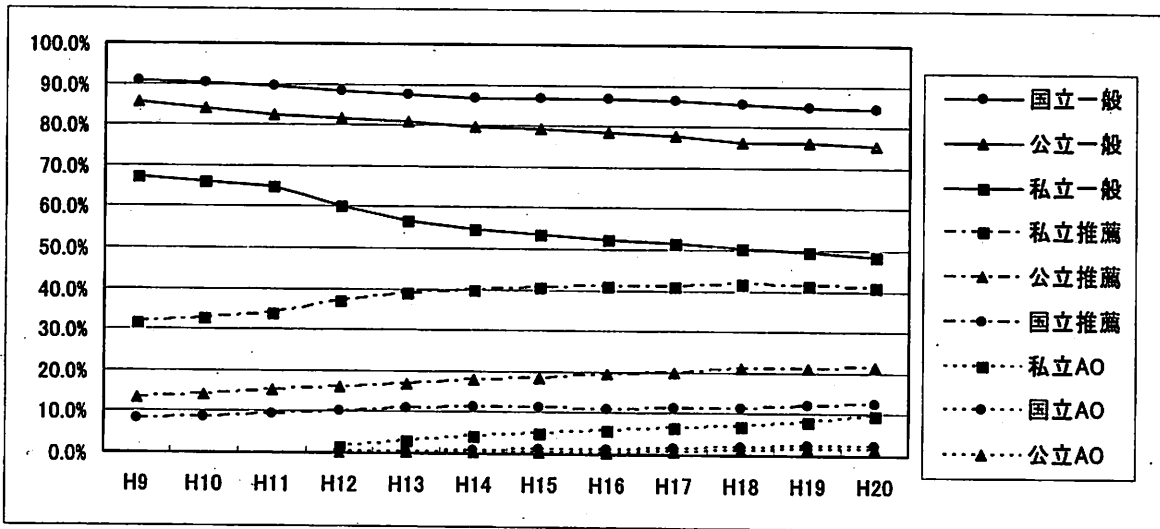


図2 国公立大別入学者の入試区分別割合の推移

2.2 入試区分による比率の変動

図2は、入試区分比率を国公立別に示したものである。変動傾向は比率の比較でより顕著に認められる。とくに、私立において変動が著しく、推薦枠が3割から5割へと緩和さ

れた平成12年以降、一般入試の比率が急速に低下し、平成19年から入学者の半数を割っている。一般入試の減少分は、平成14年度位までは推薦入試で補われていたが、推薦も40%を超えた後は、伸びが鈍っている。

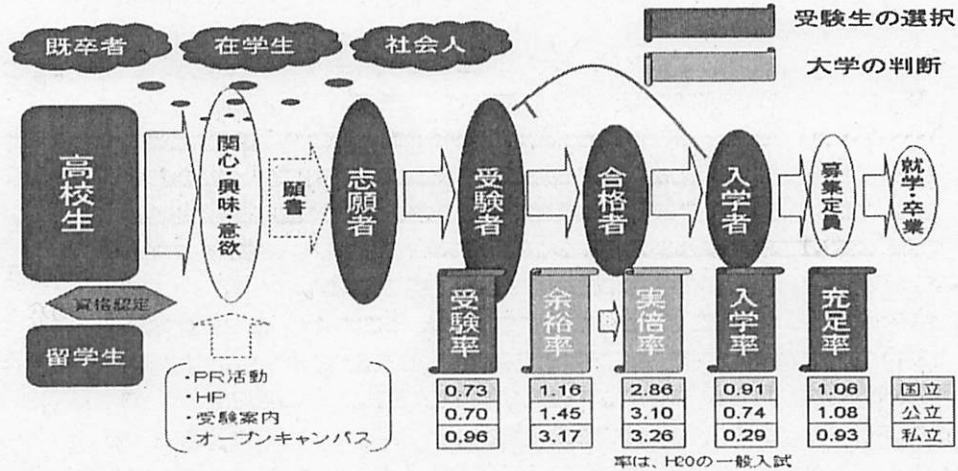


図3 入学者選抜の諸過程と指標

代わって、それまで一部でのみ実施されていたA0入試が、平成12年から国立大学でも開始されると、私立大学で急速に普及し、頭打ちにある推薦入試を補うように、一般入試の減少分をカバーして平成20年度には9%を超える状況である。

国公立では、推薦入試の着実な比率増がみられる一方、A0の増加割合はまだ低い。

2.3 選抜の諸段階における受験動向

各大学は選抜に当たりアドミッションポリシーを明示し、学部・学科・専攻などの定員構成にあわせて入試区分を決め、募集要項やホームページ、説明会・オープンキャンパスなどで、興味・関心・意欲などの喚起に努める。それらを参考に志願者が応募し、受験、合格、入学に至る各ステップには、大学の合否判定に加えて、受験者の判断と選択が各段階で行われる(図3)。これらの受験・入学動向を、志願倍率・受験率・余裕率・実倍率・入学率・充足率などから分析した。

2.3.1 志願倍率

募集定員に対する延べ志願者の割合は、変動が大きく、総体で8.3倍から6.3倍へと減少している。国立では募集定員減にもかかわらず、4.8倍から4.3倍とやや減少し、一般入試で一時5倍を超えていたものが4.5倍ま

で低下している。公立は募集増もあって7.2倍から5.4倍に低下し、一般入試では8倍から6.3倍に低下している。私立は、倍率の低い推薦・A0入試比率の増加を反映し、全体が9.2倍から6.9倍まで低下している。重複受験の可能な一般入試でも12倍から10倍台に低下している。

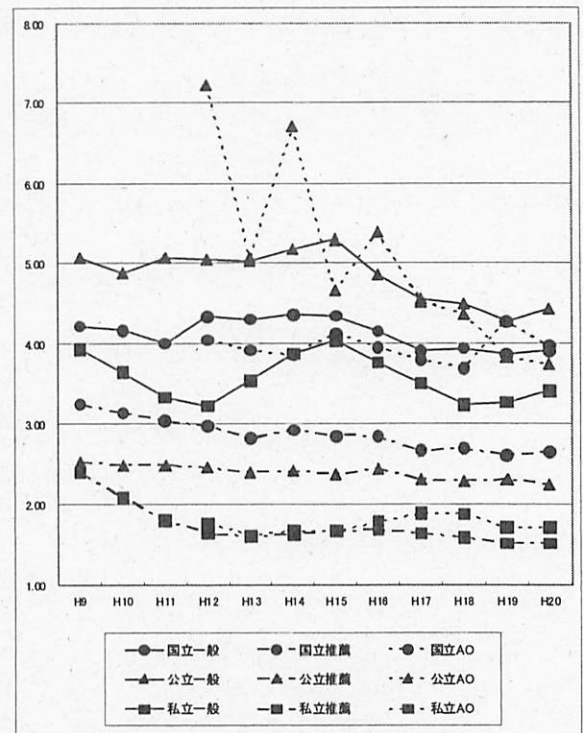


図4 入試区分別の実質志願倍率 (志願者数/合格者数) の変遷

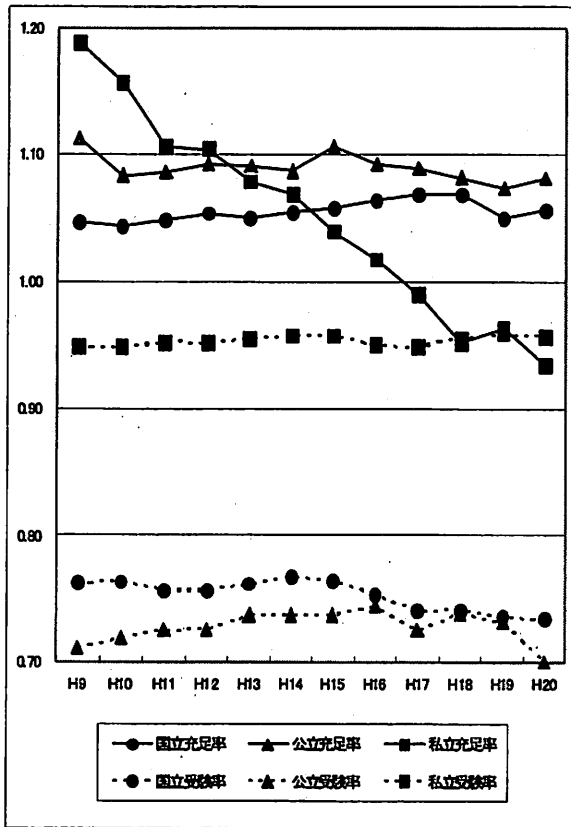


図5 一般入試の受験率（受験者／志願者）・充足率（入学者／募集定員）

合格者に対する志願者の比率（実質志願倍率）は、後述の余裕率が加味されて、入試区分毎の特徴が表れてくる（図4）。概して、公立の一般とA0が5倍近くと高く、やや減少傾向にある。国立の一般とA0がほぼ4倍前後、次いで私立の一般入試が、3倍台で変動が大きい。2倍台で国公立の推薦入試がやや減少傾向を示し、最後に私立のA0と推薦が1倍台となっている。

2.3.2 受験率

志願者のうち実際に受験した者の割合を受験率として算定した。実受験者数は一般入試と全体の集計のみがある。私立大学では、受験率は0.95の年が7年、0.96の年が5年と見事に固定され（図5）、センター試験の受験率、約0.92よりも高い。一方、国立では0.73～0.77、公立では0.70～0.74に留まる。これは、受験時期の早い私大合格者や、国公立

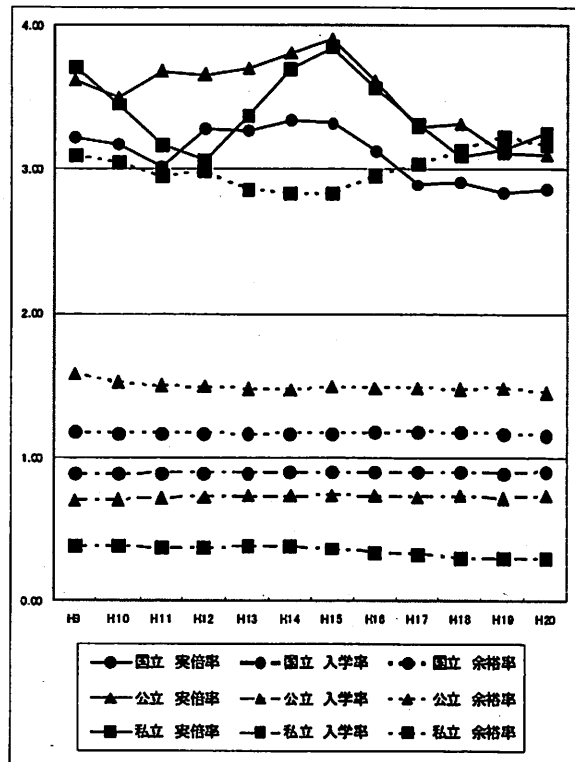


図6 一般入試の実倍率（受験者／合格者）
余裕率（合格者／募集定員）
入学率（入学者／合格者）

立の分離分割方式では、前期・推薦・A0の入学手続き者が、後期日程合格から除外されるためだろう。

2.3.3 余裕率

募集定員に対する合格者の比率を余裕率とする。合格者の決定は、入試において定員以外に唯一大学が主導的に関与出来るものである。毎年、様々な要因を熟慮の上、募集定員を満たすよう合否判断されるのであろう。この故もあってか、国立で毎年1.15、公立で1.30とほぼ一定している。しかし、私立では、一時低下した余裕率が、近年は次第に増加し3を超えている（図6）。

2.3.4 合格率（実倍率）

合格者に対する受験者の割合を実倍率とすると、一般入試では、国公立ともに3倍前後である（図6）。しかし、余裕率での調節もあってか、最近では低下傾向にある。

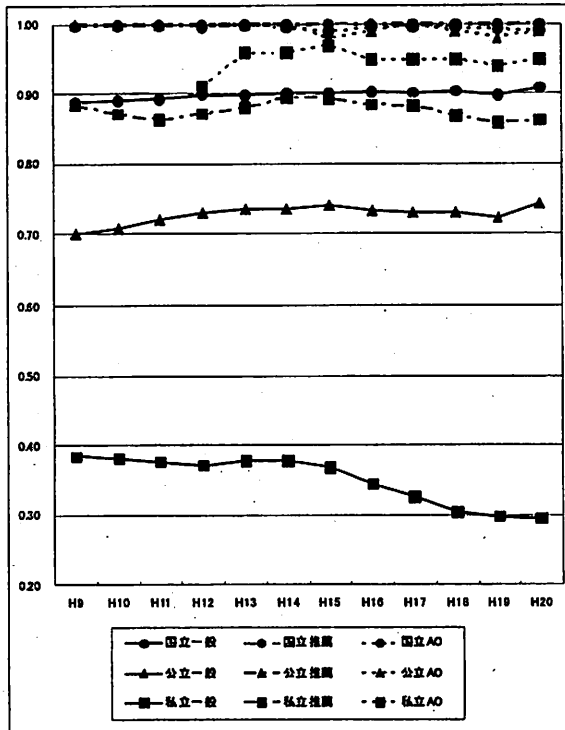


図7 入試区分別の入学率 (入学者/合格者)

2.3.5 入学率

合格した者が入学する割合を入学率とする(図7)。入試区分で大きな相違がある。国立公立では、推薦・AOはほぼ10割である。一般入試では、国立で0.89~0.91 公立で0.70~0.74とほぼ一定である。私立は、推薦で0.86~0.88, AOで初年度0.91を除き0.94~0.97と固定しているのに対し、一般入試は複数受験・合格が可能のため、0.38~0.29と低く、しかも年々低下傾向にある。

2.3.6 充足率

募集定員にたいする最終的な入学者の比率である(表1)。国立では1.04~1.07, 公立で1.06~1.09と安定している。私立では平成9年1.19だったのが、次第に低下し20年度は1.05となっている。これは、図5に見るように、一般入試で以前は約1.2あった充足率が、平成17年から募集定員を割り込み、20年には0.93と12年間で2割5分近く低下したことが影響している。

3 設置区分別まとめ

3.1 国立大学

この十年間募集定員が漸減し、とくに一般入試での入学者が一割以上減少する一方で、推薦・AO入試の着実な増加がみられる。受験率7割台、入学率9割台、充足率10割台は、ほぼ一定である。

3.2 公立大学

大学・学部新設等で募集定員が増加し入学者が増えている。その一方で、一般の受験率7割台、入学率7割台、充足率10割台は固定している。

3.3 私立大学

全体の募集定員は増加しているが、入学者数には増加傾向がみられずほぼ一定である。入試区分別では、一般選抜の入学者、入学率、充足率のいずれもが減少傾向にある。推薦入試は、一時期増加した後一定となり、やや微減傾向がみられる。その一方でAO入試は急増して9%に達し、入学率も9割5分で安定しており、推薦入試の8割台より高い。

4 入試区分別まとめ

4.1 一般入試

一般入試での志願者の受験率はほぼ固定している(国公立7割台、私立9割5分)。合格者の入学率は、国立9割、公立7割台でほぼ固定されている。私立の入学率は、元来4割近くあったものが、余裕率が上がって実倍率が維持されているにもかかわらず、3割弱と1割近い減少傾向にある。

4.2 推薦入試

推薦入試は、国公立で微増傾向だが、私立では頭打ちにある。志願倍率も私立では、1倍台である。入学率が国公立ではほぼ10割に対し、私立では8割6分前後で固定されてい

る、すなわち推薦合格者の1割半ほどが辞退者となっている。

4.3 A0入試

A0入試は、国公立いずれも入学者が増加しており、とくに私立の増加が著しい。A0入試の入学率は極めて高く、特に私立大では推薦入試と比較しても1割弱程高い。また志願倍率が国公立では、4倍台と最も高い入試区分であるのに対し、私立では推薦と並ぶ1倍台の低い倍率であり対照的である。

A0合格者の入学率が、一般入試よりも高く、とくに私立大学では推薦入試をも上回り最も入学率が高い入試区分となっていることは注目される。また国公立と私立とのA0志願倍率2極化とあわせ、とかく同一視されてきた我が国における日本型A0入試や推薦入試の特性を分析する上で、示唆に富むことである。

5 考察

今回の結果分析で、人口動態や社会状況など入試を取り巻く外部環境によって、志願者数、入学者数、合格率、入試区分割合など、現状で大きく変動しつつある数値と、そのような推移にもかかわらず、受験率や入学率などこの間ほとんど固定され、しかも設置者別間に大きな相違を示す数値指標とがあることが判明した。我が国の入学選抜の特徴をしめす定量指標と考えられる。それらの追跡は、今後の入試動向を分析する際の有力な指標として、今後の推移が注目される。

総体的に国立と公立は、ほぼ同様な傾向にあり、分離分割方式による一般入試では受験率が7割強、入学率が9割と7割強である。また、A0の志願倍率も一般入試と同等で、推薦は十割近い入学率である。

一方私立では、複数受験により、一般入試の受験率は高いものの複数合格のため入学率は低く、一方で推薦・A0では入学率は高いも

の、志願倍率が1倍台と最も低く、国公立の4倍台とは際だった対比を示している。

つまり、分離分割方式の国公立と複数受験・合格の私立大学とは、志願制度の異なる一般入試だけではなく、制度的に相違のないA0・推薦入試においても、両者で際だった対比を示している。すなわち、我が国の大学入学者選抜は、国公立と私立の2セクターにデータの的にも二分されることが、確認された。

6 今後の入試動向

これまでの大学入試において、入試区分割合、受験者数、入学者数などが大きく変動している私立セクターでは、とくに一般入試での入学率の低下が著しく、余裕率の上昇によっても充足率の低下を留められず、入学者比率の半数を割って、なおも変動しつつある。この為、入学率が極めて高いA0入試は、今後もしばらく増加傾向が続くそうである。

一方で、国公立セクターではまだ定常状態を保っているかにみえる。しかし一般入試の志願倍率や実倍率がいずれも低下傾向にあり、国公立にも変動の兆しがみられる。

少子化や国際化などこれからの社会の進展にともない、これらの数値が如何に推移していくのか、今後も追跡していく必要がある。

7 おわりに

本報告はあくまでも区分内の集計総数で、構成大学個別のデータを集積したものではない、従って外形区分による算定であり、大学の規模、学部構成や地域分布など構成グループ間にある内実の相違は全く反映しておらず、質的な比較評価を試みたものではない。また基礎データは公表されたものであり、過去に発表された研究結果などと重複する可能性があることをお断りしておく。

資料利用にご快諾いただいた文部科学省高等教育局大学入試室、またデータ集計に協力下さった岡崎智子さんに感謝申し上げます